『クリオ』23号（2009年）65-75頁

フランス留学体験記

舘　葉月

はじめに
1. 留学準備
2. 留学1年目
おわりに

はじめに

私が、パリの社会科学高等研究院 Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales （以下、EHESS[1])の博士課程で留学を開始したのは2007年9月です。1年半が過ぎた2009年の年明けに、『クリオ』編集部から今回の留学体験記の執筆依頼をいただきました。予定留学期間をまだ半分も終えていない状況で書けることがあるだろうかと少し躊躇しましたが、留学の準備段階から最初の1年の経験を知りたいという、数年後に留学を控える今年度のクリオ編集委員の意向を受けて、それならば、と引き受けました。

以下の文章は、留学の諸段階に沿って、フランス留学についての一般情報を註で補いつつ、私の個人的体験を中心に書いています。前半部分では特に、留学に向けてほかにどのような選択肢があった上で、自分が現在の状況を選んだのかということに触れるように努めました。とはいえ、自分のした選択が最良とは言わないまでも悪くなかったと留学を終えた時点で思えるのか、今はまだ見当もつきません。留学前と1年目の諸々を、そういった現在進行形の視点から振り返って綴った文章として受け取ってもらえたら幸いです。

1. 留学準備

(1)準備開始時期

博士課程に入ったらいずれは留学するものという意識はあったものの、進学後しばらくはなんら具体的な準備を進めることなく、西洋史研究室の平均である博士課程の3年目を、なんとなく留学開始時期と念頭に置いていました。実際に留学してみると、博士3年というのは、パリで出会った他大学や他の専門の方と比べると、少し遅めであるようです。しかし、私の場合、修士論文の研究会・学会での発表、投稿論文の執筆など、日本できりをつけたい作業がいくつかあり、結果的にその作業を終わらせた頃に留学したという意味で、ちょうど良かったとは思っています。一方で、博士論文の具体的なテーマが定まらないままの留学開始であり、その点は全くの見切り発車でした。あとで詳述しますが、博論のテーマが明確でなかったことが、私が最初から博士課程に入ろうと

---

[1] パリ6区のラスパイユ大通り54番地及び105番地に所在する大学院大学。フェルナン・ブロデルとリュシアン・フェーヴルによって1945年に創設された高等研究実習院 (Ecole Pratique des Hautes Etudes) の第6部門が、1975年に独立する形で作られた。社会科学の諸分野を学際的に研究することを目指した研究機関であると同時に、大学院生のみならず社会人聴講生にも開かれた教育機関である。学生の半数は留学生である。http://www.ehess.fr/fr/ (01/04/2009)

考えた理由の一つであり、留学開始当初の大きな課題でした。博士課程1年の終わり頃に、考えていた奨学金のひとつであるロータリー財団の予定年度の申請締め切りが過ぎていることに気づき、初めてもっと具体的に考え始めないとまずいと思いました。実際の留学までにはまだ1年半も残っていたのに、それからの期間はいつも何かの準備や決定に追われていた気がします。

まず、初めに考えるべきは、留学の形、すなわち大学院のどの段階に入り、どのくらいの留学期間を予定するか、でした。私の留学の数年前から、フランスの大学院制度は大きく変わっています。それまでは、学部(Licence) 3年間、修士(Maîtrise) 1年間に続いて、博士課程(Doctorat)となり、博士課程の 1 年目が博士論文計画とその一部分を論文としてまとめて免状をもらう DEA (diplôme d'études approfondies)と呼ばれる段階でした。西洋史関係の先輩の多くが DEA から始めていたように思います。今では、制度の改編により DEA は廃止され、修士課程が 2 年間に増えました。ただし、日本の制度と異なり、修士 1 年目(Master 1)と 2 年目(Master 2)は、それぞれの年度末に論文を提出する必要があり、別々の課程と考えたほうが分かりやすいかもしれません。つまり、日本で修士を出ていれば、Master 2 から登録できますし、また、日本の修士号は、フランスの Master 2 修了とも互換性があるので、同等の専門分野で、指導教官の許可があれば、初めから博士課程に入ることも制度上は可能です。そして、後者が私の選んだ留学の形でした。その選択は、連関する積極的理由と消極的理由の二つによるものでした。

まず、積極的理由としては、フランスで歴史学の博士号取得を目指したいという希望があり、それならば最初から博士課程に入ってもいいのではないかと思ったからです。以前の DEA 論文が博士論文の研究計画とケーススタディという位置づけであったのに対し、新しい Master 2 論文では、それ自体で独立・完結した論文が求められます。当然、それを博士論文に組み込むことは可能ですが、日本で提出した修士論文を博士論文計画とうまく結びつけることが出来ずに悩んでいた私にとっては、初めから博士論文を想定した研究計画を進めたいという気持ちが強くありました。

おそらく、日本にいる段階で博士論文の構想が頭にあれば、その一部分を Master 2 論文としてまとめるという選択肢もあったでしょう。実際、そういった展望で Master 2 から留学を開始し、その後博士課程に進む人も大勢います。しかし、私にとって、DEA 時代に比べて取得単位数も増えた Master 2 の 1 年間で、まとまった論文を完成させるのは非常に難しいことに思えました。これが、私が博士課程から始めたいと思った消極的理由です。様々な授業への参加や口頭発表の経験は、当然フランス語・研究の両面で有益でしょうが、博士論文のテーマが明確にならない焦りから、最初の 1 年間は研究計画に集中し、それ以外の負担を増やしたくないと思ったのです。

留学期間に関しては、個人的事情や経済状況から途中で変更せざるをえない可能性もありますし、必ずしも初めから決めておく必要はないかもしれません。けれども、特に長期の可能性を考えている場合は、全期間をカバーする奨学金は滅多にありませんので、その点は計画的に考えておいた方がいいように思います。というのも、特に私立の財団の奨学金は留学開始前の申請が条件のものが多く、日本から受給できるものに関して言えば、留学後は選択肢が減ってしまうからです。とはいえ、フランスに来てから、フラ

ンスの博士課程学生用の奨学金[2]をもらっている日本人留学生に何人か会いましたので、そういった可能性もあるでしょう。

(2) EHESS とノワリエル教授

続いて考える必要があったのは、誰に指導を依頼し、どの大学に登録するかということでした。留学する都市と指導教官のどちらを優先するかは、人によって違うと思います。ただ、歴史学専攻の場合、史料がなければ始まらないことを考えると、場所から選ぶ人の方が多いのでは、という気がします。少なくとも私の場合は、国際関係や国際組織に修士論文以来関心を持っていたので、外務省文書館や現代国際文書図書館 Bibliothèque de Documentation Internationale Contemporaine（以下、BDIC）があり、他のヨーロッパ都市にもアクセスしやすいパリがやはりいいだろうと、都市の選択を先にしました。

次に指導教官を誰にお願いするかですが、この点が私の留学準備の中で一番時間的余裕がなく、慌ただしく決断を迫られたところです。指導教官探しは、研究分野や業績などの情報から、テーマや時代が近い方を探し、日本の指導教官の推薦書などを添えて、手紙やメールでお願いするというやり方が一般的です。訪日されたことがある研究者でしたら、日本にいてもより詳しい情報が得られますし、交流のある日本人の先生に紹介をお願いすることも、連絡を円滑に取るために有効な手段でしょう。

私の場合、申請予定の奨学金の募集要項が改定され、申請時（2006 年 6 月末）に指導教官の受け入れ承諾書の提出が必要となったことが、決断を急がされた理由です。指導教官選びでは、学内でもある程度の権限を持った、けれどもおそらく多忙な、すでに名の知れた研究者に頼むのがいいのか、まだそれほど有名ではないけれど、その分時間もあり指導に熱心な中堅の研究者に頼むのがいいのか、議論が分かれますが、そして当然簡単に二類型に分けられるわけでもないですが、結果、私は前者の選択をしました。つまり、フランスの移民史研究を長らく牽引し、『歴史学の〈危機〉』の邦訳（小田中直樹・訳、木鐸社、1997 年）で日本での認知度も高い、EHESS のジェラール・ノワリエル教授[3]に指導依頼の手紙を送ったのです。私自身の博論の計画が明確でない時点では、専門研究をまとめている最中の若手の研究者よりも、すでに幅広い研究を行い、歴史学の方法論についても著作がある、ノワリエル教授に依頼するのが自分にとって有益だろうと考えたからです。ノワリエル教授の所属先である EHESS についても、修士課

---

[2] EHESS の HP 内の博士課程学生用奨学金のページ。http://www.ehess.fr/fr/etudiant/formations/doctorat/financements/ (01/04/2009)。国籍要件がないものが多いので、他の条件を満たせば、外国人学生も申請可能。

[3] Gérard Noiriel。歴史学の方法論や知識人に関する著作に加え、移民史をフランスのナショナル・ヒストリーの中に組み込むことに貢献した *Le creuset français : Histoire de l'immigration XIXe – XXe siècle*, Paris : Seuil, 1988 や、難民・サンーパピエ問題を歴史的に扱った *Réfugiés et sans-papiers. La République face au droit d'asile XIXe-XXe siècle*, Paris : Hachette, 1991 など、研究範囲は幅広い。近著は、*Immigration, antisémitisme et racisme en France (XIX-XX siècle) : Discours publics, humiliations privées*, Paris : Fayard, 2007.

程と博士課程に特化した独自の研究者養成機関であること、開講されるゼミの豊富さなどから、面白そうだと思いました。今では、自分の選択に満足し、ノワリエル教授の指導のもとで論文を完成させたいと思っていますが、留学してから半年はこの選択が適切だったのか、かなり悩みました。あとで詳述しますが、ひとつには、自分の情報収集が不足していたせいで、多くの可能性を見逃していたことに留学してから気付いたからです。たとえば、私のように国際関係史に興味がある場合、パリ第一大学や第十大学には専門の研究所・研究グループがあり[4]、当然候補に入れて考えるべきでした。これから留学を考える人は、日本での博士課程の早い時期から、自分の関心に近い研究者がどの研究機関や研究グループに所属し、そこには他にどのような研究者がいるのかといったことに注意を払っておくのがいいかもしれません。

奨学金申請に間に合うタイミングで、ノワリエル教授から指導承諾を頂き、2006 年 12 月にフランス政府の給費生試験に合格できたことで、翌年 9 月からの留学がほぼ本決定となりました。そのあとの半年は、留学前に終わらせておきたい作業（投稿論文の直し）、留学のための諸手続き（大学の入学登録、住居の手配、ヴィザの申請）、研究に関わる準備（フランス語、研究計画）などであっという間に過ぎました。2 月には、より詳細な研究計画を求められていたので、ノワリエル教授に直接会いに行き、EHESS の校舎や自分が住むことになる地区も見て回りました。必ずしも必要な作業ではないと思いますが、留学生活のイメージを膨らませることはできました。

2. 留学 1 年目

(1) パリでの生活

留学生活は楽しみにしていたものの、初めての一人暮らしに、初めての海外生活ということで、さすがに多少の不安を抱えて、2007 年 9 月半ばに、パリ南端に位置する寮に到着しましたが、それほど苦もなく生活には慣れることができました。最初は抵抗のあった共同のトイレ、キッチン、シャワーもすぐに気にならなくなってしまい、特にキッチンは他の学生との交流場所として、この寮にいた期間を通して大いに活用した場所です。パリにある大学の大半がそうだと思いますが、東大西洋史研究室の談話室にあたるような、院生同士の交流が持てる場所は、私の所属する EHESS にはなく、出席授業数も多くないとくれば、当然フランス人学生や他の留学生と知り合う機会もそうあるものではありません。私の場合、それを補ってくれたのが寮でした。市内に部屋を借りることも考えていたのですが、ユーロ高の最盛期だったこともあり、また、部屋を決めてから渡航する安心感を優先し、寮生活を選びました。結果的にとても楽しい 1 年半が過ごせました。フランス人学生だけでなく、他の様々な国の留学生とも交流を持てましたし、日本人学生も文学や哲学専攻の人が多く、日本にいたら彼らと知り合う機会はほとんどなかったでしょう。生活環境や周りの人に恵まれていたから、1 年目を乗り越えられたのではないかと、振り返ってみると感じます。というのも、研究面は決して順風満

---

[4] 例えば、パリ第一大学には、伝統的な外交史の枠を超えた国際関係史の方法論を築いた歴史家ピエール・ルヌヴァンの名を冠した研究所 Institut Pierre Renouvin (http://ipr.univ-paris1.fr/ (01/04/2009)がある。パリ第十大学には、あとで詳述する BDIC が併設されている。

帆の一年ではなく、特にテーマを決定するまでの半年と論文提出前の1ヶ月は、悩み、立ち止まることもしばしばでした。以下では、そうした研究面での一年の軌跡を時系列的に追ってみたいと思います。

(2) 登録時のやり取り

EHESSの学事日程は、パリのほかの大学とは大きくずれており、授業開始は11月初め。博士課程への登録も10月末までに済ませればいいことになっていました。したがって、初めの2週間は生活を整えたり、フランス語に触れられる場になるべく顔を出すようにしたりしながら、割合にのんびり過ごしました。こういった期間に語学学校に行くのもひとつのやり方だったかもしれません。9月最終週にノワリエル教授に面談申込みのメールを送り、10月頭に研究室に来るようにという返事を受け取りました。

2月の段階で、教授との間に、博士課程に登録するということで合意ができたつもりだったので、最初の面談はさしあたり登録に必要なサインをもらえばすぐ終わる簡単なものと思っていました。それが大きな間違いで、面談当日、私がフランスでの博士論文執筆を希望していることなど、ノワリエル教授が思いもしていなかったことが発覚したのです。2006年に東京大学とEHESSは、学術・学生交流協定を結び、博士課程の学生を対象とした1年間の交換留学[5]が始まっていたため、教授も私をその枠内で受け入れたつもりだったようなのです。そこで、私が、先生の指導学生として正規の博士課程に登録したい旨を伝えると、現段階でそれは無理だという返事。後から考えれば、フランス語で示せるきちんとした実績もない外国人学生を、文書のやり取りだけで、相互にある程度の義務と権利が生じる博士論文の指導学生として受け入れてほしいというのは、当然躊躇する依頼だったことは理解できます。面談の時点では、私と教授の間にはいかなる信頼関係も構築できていませんでした。しかし、この件を初めての面談で言われた私は、その場で軽いパニックに襲われました。今さら交換留学枠に変更することなどできません。正規の学生として受け入れてもらえなければ、滞在許可証も発行してもらえず、そもそもフランスに留まることもできないのではないか。あるいは、Master 2の学生としてなら受け入れてもらえる可能性はあるのか。しかし、10月の時点では、すでに今年度の修士課程の登録は修了しています。

まだおぼつかないフランス語で、必死にこれまでやってきたこと、フランスで博士論文を書きたいと思っていること、行政手続きの関係でどうしても正規の学生身分が必要なことを、訴えました。最終的に、教授が、EHESSの独自の制度である「博士課程準備学年 année préparatoire au doctorat」になら、正規の身分で、なおかつ、まだ教授の正式な指導学生ではないという条件で登録できるから、それで了承するならサインをしようと、提案されました。そのような制度があったこと自体、その時まで知りませんでしたが、教授の要求する水準の課題を提出することで、次年度から博士課程1年目への登録許可がもらえる、いわば以前のDEAのような位置づけで、授業履修の義務はないとのことでした。もちろん、その形での登録をお願いしました。そして、次年度の登録前

[5] http://www.e.u-tokyo.ac.jp/tyouin.html (01/04/2009) 参照。窓口になっているのは経済学研究科。他研究科の所属でも交換留学への応募は可能なようだが、要確認。

までに、博士論文の研究計画、ケーススタディ、文献目録を提出すること、ゼミでの中間報告を行うことという、課題が出されました。

この一件は、フランスに到着して少しのんびりしていた私の頭を瞬時に覚醒させるのに十分すぎるほどの威力を持っていました。なによりも、博士論文を書きたいという大きな希望を持っていたにもかかわらず、その一方で、自分がもしかしたら留学を甘く見ていたのではないかということに気付かされ、恥ずかしい気持ちにすらなりました。日本でずっと同じ研究室にいたために久しく忘れていたのですが、ここでは、自分のことを全く知らない相手に、考えていることを一から説明し、納得させ、受け入れてもらうための努力を、外国語でしなければならないという当たり前の事実を、ようやく実感を持って認識したのでした。

指導教官との関係というのは、本当に人それぞれです。私の場合は、教授が忙しいことと、最初のコミュニケーションがうまくいっていなかったことで、初めの頃こそ大変な思いをしましたが、ノワリエル教授は、決して厳しいだけの方ではなく、研究に対して非常に情熱的な方だということを、毎週のゼミに出席する中で感じるようになりました。研究テーマを決める過程で、フランス国内の移民・難民問題研究よりも国際関係史の方に関心が傾き、ノワリエル教授の専門からむしろ遠ざかった時に、指導教官を次年度以降変えたほうがいいのかとも悩みました。しかし、現状に甘んじず、歴史学の方法論を批判的に検討し、新しいアプローチを用いた自らの研究成果を話すノワリエル教授の講義は大変刺激的で、扱うテーマは違えども、方法論上、身になるところは多いのではないかと思いました。そして、半年が過ぎる頃には、教授の承諾をぜひとももらって、このまま指導を受け続けたいと思うようになりました。ゼミ以外の指導に関して言えば、教授がご多忙なこともあり、定期的な面談などはありません。しかし、面談の申し込みや提出書類へのサインなど、こちらからお願いすれば快く引き受けてくれます。私の周りの留学生に話を聞いても、博士課程であればなおさら、教授から個別に細かく指導を受けているという話はほとんど聞きません。数週間おきに研究テーマの中間報告を義務付けられ、大変な思いをしたという Master 2 の学生の話も聞きましたが、それは稀なケースだと思います。日本から指導教官を選ぶ際に、指導方法までは分かるものではありませんが、共通して言えることは、どの方も非常に忙しくしており、学生の方から積極的に連絡を取り、指導をお願いしていかないと、簡単に忘れ去られてしまうということです。しかし、こちらからお願いすれば、ほとんどの研究者の方が、たとえゼミを聴講しているだけの学生に対してであっても、快く相談に応じてくれます。

(3) 研究テーマ決定に向けて

1年目の具体的な課題をもらえたのは、むしろ幸運なことと、考え方を切り替え、とにかく博士論文のテーマを決めなければ始まらないということで、最初の数か月は、二次文献を幅広く読み、研究史を把握し自分の問題関心を明確にすることに努めました。修士論文まで、私は一貫して、ロシア革命後に祖国を追われ、国際問題化したロシア難民と、主要な受け入れ国であるフランスの関係について研究してきました。しかし、博士課程に進学後、日本での指導教授との面談の際にも、思い切ってテーマを変えることを提案されていましたし、私自身、研究の蓄積がここ数年でさらに増加したこの分野で、

博士論文のテーマとなりうるような問題設定を見つけることに困難を感じていました。それでも、愛着のあるテーマだっただけに、すっぱりと捨てきることもできず、留学後の数か月も、難民問題を関連させつつも、広がりのあるテーマ設定を模索していました。そこにこだわるあまり、多少無理がある方向に進みかけていたことを、はっきりと指摘してくださったのが、パリ第十大学のゾヴィナール・ケヴォニアン先生でした。

2004 年に出版された、ケヴォニアン先生の中東地域における難民問題とヨーロッパの人道外交に関する研究[6]は、できたらこんな研究を自分がしてみたかったと思うほど感銘を受けたもので、同時に、この研究が出てしまったから、難民問題から離れなければいけないのではないかと感じてもいました。ノワリエル教授との面談後、テーマを決めるにあたり、ケヴォニアン先生の意見をぜひ伺ってみたいと思い、パリ第十大学での授業を聴講することにしました。初めて授業に出席した後、面談のお願いをすると、大学のある郊外のナンテールではなく、お互いに都合の良いようパリ市内のカフェでお話ししましょう、という親切な申し出をしてくださいました。現在、パリ第十大学の准教授で教授資格取得論文[7]を執筆中のケヴォニアン先生は、3 人のお子さんの母親でもあり、以前は国際大学都市 Cité Internationale Universitaire de Paris[8]のアルメニア館の館長を務め、外国人留学生の世話をしていた経歴もある、活発な印象の、生き生きとした方でした。待ち合わせのカフェでそんな話を少しだけしてくれたあと、それでは、あなたの研究の話をしましょう、と、私が用意してきたレジュメや参考文献に目を通しながら、私の話にいろいろと質問をしてくださいました。こうした面談を 11 月と 1 月に行い、結果的に、私の問題関心で難民問題に関するオリジナリティのある研究を行うのは難しいであろうこと、むしろ新しい関心事として挙げている捕虜兵問題のほうが可能性のあること、そして国際連盟よりも赤十字国際委員会 Comité international de la Croix Rouge に着目する視点はおもしろいかもしれない、といったアドヴァイスをくださいました。かなりはっきりした物言いをする方でしたが、不安そうな顔をしていた私に対して、「自分がオリジナリティのある研究ができているかは誰だって常に不安なものだし、テーマが決まるまでは本当に大変だけれども、それさえ納得できるものを見つければ、あとは邁進するだけよ。きっと大丈夫だから頑張って」と、力強く励ましてくださいました。ここまではっきりと自信を持って、専門の先生におっしゃってもらったことで、そ

---

[6] Dzovinar Kévonian, *Réfugiés et diplomatie humanitaire: les acteurs européens et la scène proche-orientale pendant l'entre-deux-guerres*, Paris : Publication de la Sorbonne, 2004.

[7] フランスでは、准教授 maître de conférence 身分の研究者には、博士課程学生の指導資格はない。研究指導資格 Habilitation à diriger des recherches 取得論文を受理された研究者が、大学教授 professeur 職を得られ、博士論文指導も行うことができる。

[8] パリ 14 区（南部）に位置する、40 ほどの学生寮が集まり、5000 人以上の学生が居住する地区の総称。1920 年代に誕生し、寮の多くが私設財団や外国政府の資金提供によって建設された。住宅難のパリ市内にある学生寮の多くは外国人には入居が困難と言われるが、ここは留学生を優先的に受け入れる。日本人学生の場合、通常は日本館 Maison du Japon を通じて入居申請をする。

れまでの難民問題から捕虜兵に関する問題に路線を変更する決断をできたのだと思います。

ジュネーヴの赤十字国際委員会に関する歴史研究は、その活動の知名度に比して、それほど数は多くないのですが、1996 年まで史料の一般閲覧が制限されていたことが、ひとつの大きな原因です。しかし、現在では利用可能となり、特に私が研究している両大戦間期に関しては、大半の史料が公開され、一部目録はオンラインからも確認できます。また、隣接する図書館には、創設（1863 年）以来の赤十字国際委員会や各国赤十字社、国際人道活動一般、国際人道法についての著作が豊富に収められており、関係する修士論文や博士論文も寄贈されています[9]。1 月末に新しいテーマに移った後、まず、赤十字国際委員会と捕虜兵問題に関する研究史を洗い直しました。そして、3 月になってから、公開されている史料の状況を確かめ、学位論文まで含んだ研究史と照らし合わせて、博士論文の研究テーマを最終的に決定するために、スイスに 1 週間ほど滞在しました。図書館に収められていた修士論文の中に、私が考えていたものと似通ったテーマで書かれたものがあったために、パリで考えてきたものからの軌道修正を余儀なくされましたが、最終的には具体的な問題設定が固まり、研究計画とケーススタディの見取り図を決めることができました。

こうして、留学当初から、もっといえば、日本で博士課程に入った時からずっと悩んでいたテーマ決定という課題を、ようやくここにきてクリアすることができたのです。この時点でもう 3 月も終わり。公の締め切り[10]はないものの、ノワリエル教授とは 9 月に論文提出という話になっていたので、それからの 5 ヶ月間は、史料調査と執筆を同時並行で進めていくことにしました。

(4) 研究計画論文の執筆

実際の史料分析をまだほとんど行っていない状況で、5 ヶ月で 100 ページ程度の論文をフランス語で仕上げることが果たして可能なのか、見当もつきませんでしたが、寮が 8 月いっぱい閉まってしまう状況も考慮し、細かいタイム・スケジュールを考えておくことが必要に思えました。まず、ひとつ目の区切りが 6 月頭に予定されているゼミでの口頭発表。これは、研究の具体的内容というよりは、『社会歴史学入門 Introduction à la socio-histoire[11] 』というゼミのテーマに合わせて、各自の研究計画を研究史・問題設定・史料など方法論の観点から報告することが求められており、私が提出する予定の論文でいえば、前半部分の内容です。そこで、報告の反省を含められるよう 6 月後半まで

---

[9] 文書に関しては、http://www.cicr.org/web/fre/sitefre0.nsf/htmlall/archives?OpenDocument (01/04/2009)、図書館に関しては、 http://www.cicr.org/web/fre/sitefre0.nsf/htmlall/section_library_and_research_service?OpenDocument (01/04/2009)を参照。文書の閲覧に際しては事前連絡が必要。

[10] Master 2 に登録している場合、論文の提出は 6 月か 9 月のどちらか選べる場合が多いが、中には締め切りを 6 月にしか設けていない大学もある。

[11] このテーマについては、Gérard Noiriel, *Introduction à la socio-histoire*, Paris, 2006。EHESS の全ての授業内容は、講師や専門別に HP で閲覧可能。例えば、2008-2009 年の授業を担当講師別に探す場合は、http://www.ehess.fr/fr/enseignement/enseignements/2008/enseignant/ (01/04/2009)。

を、論文の前半に充てる時期とすることにしました。その後、ケーススタディのための史料分析を集中的に行うことにし、7 月をフランス外務省文書館で、住居がなくなってしまう 8 月はまた赤十字文書館で作業をし、9 月半ばに論文を提出することを目標としました。

実際の史料分析に 2 か月しかかけられないことに若干の不安が残ったものの、Master 2 論文と異なり、それ自体の完成度よりも、博士論文としての可能性が今回の論文には問われていると考え、とりあえず後半のことは忘れることにしました。この間、主に使っていたのは、フランス国立図書館 Bibliothèque nationale de France とパリ第十大学の敷地内にある BDIC[12]です。13 区にある、本を模したという現代建築でも有名な国立図書館（通称 François-Mitterrand）は、地上階の一般閲覧室と地下の研究者用閲覧室に分かれており、大学院生が後者を利用するためには、指導教官の推薦書とその場での簡単な面接が必要です。規模が大きいために、荷物の預け入れや途中退出の手続きなどの点では、多少手間がかかりますが、やはり蔵書は豊富で、また、8 時まで空いている図書館はパリには少ないので、その点では重宝します。BDIC は、場所は少し不便なのですが、国際関係に関する専門的な図書館なので、この分野に関しては、フランス語以外の文献は国立図書館よりも蔵書が豊富です。また一次史料も所蔵しているので、検索をしていると思わぬ発見をすることがあります。

5 月半ばまでに、大枠の問題設定を決め、研究史の整理を行った後に、それまで論文用に書いていた文書を、発表用に再構成する作業を始めました。持ち時間は 20 分。A4 で 7−8 枚の大したことのない量ではありましたが、初めてのフランス語での口頭発表であることと、研究計画の詳細に関して初めて指導教授に報告する場であったことで、二重の意味で緊張しました。終わった時は本当にほっとして、また、自分の研究をようやく提示できたことに久しぶりの充実感を覚えました。その後は、このときに教授からいただいたコメントを参考にしつつ、6 月末までに問題設定・研究史・考えられる論文構成についての論文を仕上げ、経過報告として、教授に提出しました。

そして、いよいよ史料分析と考えたところで、新たな問題に直面してしまいました。アンヴァリッド近くの外務省内にある外務省文書館[13]が郊外への移転作業のために定期的に閉室になっていることは知っていたのですが、久しぶりにサイトをチェックしてみると、7 月から 1 年間の全面閉鎖になっていたのです。赤十字国際委員会を中心に論じるにしろ、その組織史としてよりも、第一次大戦後の諸国家との交渉の中で行われた「人道外交」の側面に光を当てたいと考えていたので、連合国の一員であったフランスの外交史料がなければ、ケーススタディを完成させることはできません。全面閉鎖をしてしまうフランスにもタイミングの悪い自分にも腹が立ちましたが、落ち込んでいる時

---

[12] http://www.bdic.fr/index.php (01/04/2009) 参照。また、この機関が主導している、20 世紀を対象とした研究論文や BDIC の文書紹介を掲載した月刊誌 *Matériaux pour l'histoire de notre temps* も現代史研究者には有用である。

[13] http://www.diplomatie.gouv.fr/fr/ministere_817/archives-patrimoine_3512/archives-diplomatiques_5142/index.html (01/04/2009)。移転先は、パリの北の郊外に位置する La Courneuve、2009 年夏に再オープンの予定。閉鎖中、一部マイクロフィルムは国立文書館で閲覧可能。

間もないほどリミットは近付いてきています。そこで、急遽、それまで使ったことがなかったため、次年度以降にゆっくりと考えていた、軍事史料館 Service historique de la Defence[14]に行ってみることにしました。パリ西部のヴァンセンヌ城内にあるこの史料館は、事前予約が必要など、少し手間がかかりますが、行ってみるとなかなか使い勝手がよく、外務省文書館と違って、カメラ撮影も許可されていたので、必要史料をスイスまで持っていって分析することが可能だと分かりました。また、論文の内容を多少軌道修正する必要はありましたが、十分におもしろい史料を見つけることができました。

こうして、最後まで慌ただしくパリで作業をし、8 月 1 日にはまたスイスに向かうために、リヨン駅から電車に乗りました。偶然にもこの日はスイスの建国記念日。夜にはレマン湖岸のあちこちの街で花火が上がるのを、湖畔から眺めました。湖の対岸はフランスなので、この土地では、7 月 14 日の革命記念日と 8 月 1 日の両方に花火を楽しめるそうです。赤十字の史料分析と同時並行で論文を仕上げられるか不安に思いながらのスイス行きだったのですが、結果的に場所を変えての作業はむしろ集中できる環境を作れたと思います。史料のあるジュネーヴと滞在先のヴヴェイの片道 1 時間の道のりを毎日往復する 1 ヶ月間だったのですが、レマン湖沿いを走る汽車に揺られての行き帰りは、車窓からの景色を見ながら何も考えないでいられる大切な時間でした。

ジュネーヴでは、赤十字の史料室と図書館を両方使いながら、作業を進めました。こうした小さい専門的な図書館に毎日通うことのいいところは、同じ専門を扱っている人と出会える機会があることです。たとえば、たまたまで向かい合っていた女性が第二次大戦中の赤十字国際委員会とスイスの関係についての博士論文をパリ第十大学に提出したばかりということで、同じ歴史研究者ならぜひと、10 月の口頭試問に誘ってくれました。私は、パリで国際関係史の研究室にいるわけではなく、1 年目は講演会などにもあまり参加していなかったので、専門の近い学生と話す機会がなかなかないことを残念に思っていました。それだけに、このジュネーヴでの出会いは、嬉しいものでした。

そうした思いがけない出来事がありつつも、基本的には粛々と論文執筆を進める一ヶ月が過ぎ、パリに戻る頃には、あともう一歩というところまで達せました。そして、パリで結論部分を書き、友達にフランス語添削をお願いした後、9 月半ばにノワリエル教授に研究計画論文として提出しました。

おわりに

論文提出後の面談で、2009 年度から正式にノワリエル教授の指導学生として博士課程に登録してよいという許可をいただきました[15]。長かった 1 年間が終わったことにほっとしましたが、実際は、ようやくスタート地点に立ったところです。現在は、図書館

---

[14] http://www.servicehistorique.sga.defense.gouv.fr/ (01/04/2009)。HP から詳細な目録の閲覧が可能。

[15] 論文題目は、« Le rôle du Comité international de la Croix Rouge et les politiques des Alliés dans la tâche humanitaire internationale : le rapatriement des prisonniers de guerre au lendemain de la Première Guerre mondiale »。 準備中の博士論文の題目は、パリ第十大学の Fichier Central des Thèses に登録される。http://fct.u-paris10.fr/index.jsp (01/04/2009)で、自分のテーマに近い準備中の博論テーマをキーワードなどで検索可能。

や文書館で文献を読み進めたり、史料分析を続けたりする一方で、興味あるセミナーや講演には以前より積極的に出かけるようにしています。終わったから言えることかもしれませんが、1年間の試用期間は、最初から受け入れてもらえるよりも、私に留学生活を進めていく上での強さを与えてくれたように思います。それでも、いろいろと心臓に悪かったので、留学前から指導教官と連絡を密にとり、準備をしっかりしておくに越したことはありませんが。パリに1年半暮らしてみて感じることは、良くも悪くも、日本にいるよりも多くの偶然や思わぬ出来事に遭遇し、外国人として生活することはかなりのエネルギーを必要とするということです。けれども、振り返ってみると、この間に、様々な出会いがあり、いろいろな人に助けられていたことにも気付かされます。まだ折り返し地点にも達していない私の留学経験に結論めいたことは言えません。ましてや「留学とは何か」とここでまとめることもできませんが、この時期が私の人生の中で重要で大切なものになるという予感はあります。それは多くの人にとってそうなのかもしれません。あるいは、そうなるように今後の留学生活を続けていきたいと今は思います。